

# 入院中のお父さんへ、大好きだった「古城」を演奏

ピアニスト

## 伊藤亜希子さんの音色に、目を開け、右手を上げた

函館おしま病院 診療放射線技師長  
企画部 藤田佳久さん 文・写真



「きこえてる？お父さん・・・」



「聴けてよかった。ありがとう」

当院のホスピス病棟1階では落語や演芸、フラ、フラメンコ、クラシック、民謡など、アマチュアからプロに至るまで多くの人たちによるボランティアイベントを実施してきました。患者さんや家族にとって、一度限りになるかもしれないイベントが生んだ数々の感動的なシーンを、私はカメラのファインダー越しに写真に収めてきました。今年4月の伊藤亜希子さんのピアノコンサートの一つです。

当時、伊藤さんのお父さんは介護病棟に療養中でした。「父が元気なうちに、感謝の気持ちを自分の演奏で伝えたい」という伊藤さんの思いから、ホスピス病棟の患者さんと家族も一緒に聴けるようにと準備を進めていました。

その間にもお父さんは眠りがちになり、そうした姿に不安を抱きながら当日を迎えました。

伊藤さんの演奏中、お父さんはほとんど目を閉じていましたが、ムソルグスキー「展覧会の絵」の「古城」を弾きだすと、パッと目を開け、右手を少し上げました。自宅で弾いているときには「この曲好きだなあ」と言っても口ずさむこともあったそうで、聞き覚えのあるその音色に懐かしい日々が甦ったのでしよう。娘の思いが届き、それに応えた父親の姿でした。

たよね。お父さん」と聞こえてくるようにでした。

今、この瞬間のありがたさと儚さに堪えて、お父さんへの思いをピアノに込め、にじむ音符を追いながら優しくはじく指先。目を閉じ、思い出を重ね奏でる音色の数々と、なごりを惜しむラスト曲。ふと見ると、いつの間にか弾き終えた娘を確認するかのようにつきかりと目を開けている父親の姿がありました。笑みを浮かべ、手を握る光景は我が子をいたわっているようです。

「入院してからは、こんな笑顔を私に見せたことはなかったです」。伊藤さんの瞳からは、さらにに大粒の涙がこぼれ落ちました。